



教職大学院 Newsletter

No. 38

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2012.02.02

福井大学教育地域科学部附属学校園の協働研究とマネジメント

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 森 透

個人的なことになりますが、私は2006（平成18）年4月から3年間、附属幼稚園の園長、2009（平成21）年4月から現在まで附属特別支援学校の校長を兼務しています。この巻頭言の場をお借りして、附属学校園の現状と課題、そして教職大学院との関係などを紹介させていただき、附属学校園のあり方を一緒に考えていただければと思います。

私が園長になった2006年は、2つの大きな課題が附属学校園にはありました。第1は法人化された大学の附属学校園としての役割と課題です。つまり、国立大学は2004年度から法人化され、6年ごとの中期目標・中期計画を遂行する義務が課されましたが、その中で附属学校園の存在意義を問い直し、附属として何をすべきなのかということを考え実施する課題がありました。

第2は、2001年11月のいわゆる「在り方懇」報告書で指摘された教員養成系大学・学部在り方、附属学校園のあり方の検討です（文部省「今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について」）。この報告文書では附属学校園が有効に活用されていない現状や存在意義を根本から問い直す指摘がなされ、この流れはその後引き継がれ、2009年3月の「国立大学附属学校の新たな活用方策等について」（文科省）の通達となります。この中で、文科省は附属学校園の役割として、「公立学校で実施するものとは異なる先導的・実験的な取組を中長期的視点から実施し、関連する調査研究を推進する『拠点校』」、「地域の教育の『モデル校』として、地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の一層の推進」を提言しました。この提言は附属にとって大きな課題となっています。

私は幼稚園の責任者として幼稚園全体を見渡すという立場でしたが、実質的な管理運営全体の責任者は副園長（公立学校との交流人事による）という仕組みでした。全国の国立大学附属学校園の園長は学部の教授が兼務しますが、実際の日常的な責任のすべては公

立との交流人事で着任した副園長が担当するというシステムが一般的だと思います。当時の私はまだ学校組織のマネジメントという考えをあまり意識していませんでしたが、私の一番の思いは、それまでに4つの附属学校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）にいろいろな形で関わらせていただいていたので、「4つの附属をつなげたい」というものでした。4つの附属はそれぞれ個性を持ち日々の実践に精力的に取り組み、子どもたち一人ひとりを大事にして成長を願い、探究とコミュニケーションを軸に実践を展開しているととらえていました。しかしお互いの実践の交流は少なく、特に幼稚園—小学校—中学校は基本的に共通する子どもたちが12年間学び成長する場であるにもかかわらず、それぞれの先生方がお互いの実践を理解しあっていないことが残念で、附属の先生方がもっとお互いの実践を交流し理解し合ってもよいのではないかと考えました。

そこで、4つの附属が大事にしていることを伝え合う場、理解し合う交流の場をつくろうと当時の4校園の管理職で相談して「附属合同研究会」を立ち上げました。第1回目が2007年8月に附属中学校に100名近い附属の先生方が集い、お互いの実践を語り合う場を持ちました。4校園の先生方は小グループで自分の実践記録を持ちより、校種や教科を超えてじっくり語り合うこと、そのグループの司会と記録を大学の教員が担当すると

内容

福井大学教育地域科学部学校園の協働研究とマネジメント (1) 冬の集中講座を終えて (2) 日本教職大学院協会シンポジウムに参加して (4) 連携校だより (7) 教師教育ネットワーク・交流のひろば (9) 福井大学3月ラウンドテーブル案内 (11) 図書紹介 (12)

いうものでした。それからは毎年開催し、今年度は2011年8月に第5回目の合同研究会を開催することができました。毎回報告書を発行していますが、参加された先生方の感想としては、非常に新鮮で、近くにいなながら他の附属がこんな実践をしていることはほとんど知らなかった、特別支援学校の実践は一人ひとりの子どもと正面から向き合うので教育の原点を教えられるなど、参加された先生方のほとんどが感動的に語っておられました。このように附属合同研究会は大きな役割を果たしてきたと思いますが、今後の在り方を見直すべき時期になっていると思います。

最後に、附属と教職大学院との関係を3点紹介します。第1は、上述した「合同研究会」は毎回4校園の研究主任が協働して準備してきましたが、それをサポートした中心が教職大学院の教員であるということです。教職大学院の拠点校でもある附属学校園を協働してサポートするという構えが教職大学院にはありません。

第2は、教職大学院の若い院生（学部卒）が2年間インターンシップを拠点校である附属学校園で経験していることです。教職大学院が発足した2008年度から幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校に各1～2名の院生が1年目は週3回「教師の総体を学ぶ」というインターンシップを経験し、2年目の前半は教員採用試験を主にして、後半で附属にかなり入り込み2年間の総まとめを長期実践研究報告に書きます。このインターン

シップ生への支援を附属学校園にお願いしています。

第3は附属の実践研究に教職大学院の教員も含めて学部の教員が積極的に参加していることです。日常の研究や研究集会の指導助言など、様々な支援を行っています。

最近、日本教育経営学会が「校長の専門職基準[2009年版]—求められる校長像とその力量—」（2009年6月）を公表しましたが、その中で、「あらゆる児童生徒に対して行われる教育活動の質的改善がなされるように、学校としての共有ビジョンの確立、カリキュラムの開発・編成、教職員の職能開発、あるいは教職員の協力体制と協働的な風土づくりなど、様々な組織的条件を整え構築することが、校長の役割の中心に置かれなければならない。管理的職務や、近年、文部科学省によって推奨され全国展開されつつある『学校組織マネジメント研修』で扱われている組織マネジメントの手法などは、そのような校長の役割遂行の一環として位置づけられるべきものである」と述べられています。私の6年間の附属での経験はこの基準に照らしてどうであったのかも省察する必要を感じています。

附属学校園が地域の先進的なモデル校としてどこまでできるのか。公立学校との交流人事というシステムの中で、附属の役割は何なのか。まだまだ模索は続くと思いますが、着実な歩みができたらと願っています。

冬の集中講座を終えて

12月の終わりから1月にかけて、3日間の集中講座が2サイクルにわたって開かれました。これまでの日々の記録を丹念に読み直すことで長い実践の展開を跡づけ、そこで生まれた成長や変化を支える要因・編成・組織を探りながら報告書の作成に取り組みました。その成果は、「長期実践研究報告」（M1は「1年目のまとめ」）として刊行されます。参加した院生に集中講座を振り返って考えたことを紹介してもらいます。

スクールリーダー養成コース1年／福井県立坂井農業高等学校 森 克彦

私は、前半の12月26、27、28日の3日間の集中講座に参加した。早いもので福井大学教職大学院のスクールリーダー養成コースに入学して9ヶ月が経ってしまった。参加するたびに、心地よい疲労感を味わいつつも贅沢な時間を過ごしていることを実感している。いろいろな立場の先生との話し合いは、良い刺激を与えてくれる。自分に何ができるのか、学校で何をしなければ

ばいけないのか等々課題は山積しているが、スクールリーダーとしての自分は特別何もできていないのが現状である。

初日は、朝起きてまず娘とクリスマスツリーの後片付けをし、昨年購入した除雪棒を車に積んで大学に向かった。今回の集中講座は、今までの記録を綴るのが課題とわかっていたにもかかわらず、特別何も考えな

いまの参加だった。毎月のカンファレンスとは雰囲気異なり、緊張感が漂っていたような気がした。まず日程の確認、その後記録することの意味、公教育の課題等についての説明が柳澤先生からあり、グループ毎に進め方の確認をして、それぞれが実践報告づくりの為にパソコンに向かった。好きな場所で作業ができるが、周りの先生方の熱心さに圧倒され、何から始めようかと考えるだけで時間が過ぎてしまった。もっと余裕を持って考えておけばよかったと思っても、後の祭りであった。

2日目も、前日の続きで個別作業が主だった。午後には、松木先生から「中教審（教員の資質能力向上特別部会）を物語る－福井大学の取組と絡めて考える－」と題しての講義があった。時間の制約があり十分な理解はできなかったが、機会があればもう少し解説していただけたらと思う。予定の時間を超過したことに気づかないくらいいろいろなことを考えたが、まとめの作業は進まなかった。

「この冬の集中講座は大変ですよ。がんばって下さい。」とM2の院生方から聞かされてた。しかし、自分にはなんだかそんな風に思えず、「なんとかなるさ。」と思っていた。当日は、とりあえず今までのカンファレンスの資料を持って行けば、それでいいのではないかと考えていた。

グループになり、「先生は、どんな風にかこうと思っていらいしゃいますか。」とグループの担当である松田先生に聞かれ、「何となく日記みたいに書いてみようかと思えます。」と答えた。何の構想もなかったもので、そう答えたのであるが、そう答えた自分がいかに甘かったのかを反省させられた。他の先生はしっかりとした構想を持っており、自分一人が後れをとった気がした。（実際に遅れていたのだが・・・）

ちょっと焦りながら、パソコンに向かった。

今までやってきたこと、書きためていた物を時系列でつなげていった。つなげただけで、主になる物があるわけではない。それを最初から読み返していくうちに、自分のやってきたことが「今」の時点として、何となく見える気がしてきた。でもはっきりとは見えず、どうすればいいかと考えるばかりであった。

自分の追い求めていたものは何だろう。はっきりしないまま書き始めた。

すると、これまでの自分の教員生活を振り返るところで、自分が多くの先生方に支えられ、暖かなつな

最終日は、最後にA4版1枚程度に記録の内容をまとめたものを示すという課題があり、省察と記録の作成を行った。思いを文章にするというのは簡単ではないとつくづく感じた。午後には、福井県教育研究所の西村先生から「学校の教育力向上につながる教員研修」と題して、また牧田先生から「長期実践報告作成の意味」と題しての講義があった。両先生の話からは十分な経験が礎になっていることがうかがえた。到底足下にも及ばないが、少しでも近づけることができるようになりたいという思いは膨らんだ。

今回の集中講座は、何らかの形にしなればという思いで臨んだが時間がない。原稿提出締め切り日までには何とかしなければいけないというプレッシャーを感じながら、現在記録の作成を行っているところである。

スクールリーダー養成コース1年／南越前町立南条小学校 赤澤 清和

りの中で働いてこられたことに気づかされた。いつも一人ではなかったと、改めて感じずにはいられなかった。はたして、自分は、現在勤務している南条小学校の中に、このようなあたたかなつながりが作れているのだろうか。教師と教師、教師と子どもの中に、そのあたたかなつながりができるようにしていかなければならないと思うようになってきた。そんなことが伝わるように、この報告書を書いてみたいと思った。書くことをあまり得意としていない自分にとって、かなり難題となるかもしれないが、最後までしっかりとやり遂げたいと思った。

また、グループの担当であった松田先生が、最後に「みなさんは、今、このようにしていることは『迷悟不二』なんです。」とおっしゃった。そして、「今、みなさんは迷って苦しんでいます。しかしその方が悟りがあります。」と。この言葉が、とても今の自分の励みになっている。やり遂げた後にはきっと、何かが見えてくるんじゃないかと思った。

この感想を書いてはいるが、まだ報告書は完成していない。あと数日、自分としっかりと向き合ってみようと思う。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校インターン
佐々木 梨衣

私は、4月から附属小学校にインターンシップをさせて頂いているが、日々前に進むことに一生懸命で、振り返る時間を持てなかった。そのため、冬の集中講義では3日間を使ってじっくりと自分の書いてきた記録を読み、当時自分が考えていたことと、今自分が思うことを比べる時間をじっくりととれたことが非常に良かったと思う。

4月からの9ヶ月間程の記録の中には、自分の立場が難しく悩んでいたことや、子どもとの関係性を築く難しさに苦しんでいたこと、先生方と一緒に仕事をできる喜びを感じていたことなど、様々な自分の思いが綴られていた。それを改めて読むのは、恥ずかしくもあり、苦しくもなった。その一方で、記録を読み返す度に新たな見方が生まれてきた。夏の集中では、記録の見返し方も分からずなんとなく読み進めていたが、冬の集中では、記録を読み直す楽しさが少しずつ分かかってきたような気がする。

冬の集中講座を通して、9ヶ月のインターンシップが今の自分をどう形成しているのか、今の自分にどう影響しているのかを考えてみると、このインターンシップの意味がみえてきたような気がした。記録の中の出来事や感じたことの一つひとつが、今の私をつくっていると思う。冬の集中で取り上げたのは、「1回目の授業実践」と「主免教育実習」である。「1回

目の授業実践」では国語を行ったが、教材研究で掘んだことを子どもたちに学んでほしいという強い思いが空回りしてしまったことを書き綴った。そして、「主免教育実習」では、教育実習生をサポートすることで、自分の中にある学びを見つけられていない自分自身をごまかそうとしていたことを書き綴った。

この2つは私にとってとても苦しかった出来事であり、それを文字にすることはそれ以上につらいことであった。しかし、文字にすることで、当時の苦しみにも理由があったこと、そしてそれがどういう経緯で解決されていったのかということが見えてきた。「苦しかった出来事」はそのままにしておくと思いたくないものになってしまうが、文字にして見つめることで「忘れられない学び」にすることができた。

この冬の集中講座では、インターンシップでの学びと木曜カンファレンスでの語り合いでの学び、合同カンファレンスでの学びをつなげながら振り返ることができた。9ヶ月のインターンシップを振り返る中で、その思いの根拠は木曜カンファレンスのある言葉にあったこと、合同カンファレンスでのお話の中で感じたものがあったことを見えてきた。大学院での様々な場面での学びをつなげながら、そして、見つめていくことで「かけがえのない学び」にしていきたいと思う。

日本教職大学院協会シンポジウムに参加して

12月11日(日)、平成23年度教職大学院協会シンポジウムが東京都千代田区学術総合センターにおいて開催されました。シンポジウムでは、各界からの教職大学院への期待・提言を踏まえ、4年目を迎えた教職大学院の成果と課題が議論されました。教職大学院関係者、教育委員会関係者、学校関係者など約260名の参加がありました。午後のポスターセッションでは、25教職大学院の院生・修了生が学修の成果について発表及び質疑応答を行いました。今回、ポスター発表をされた丸岡南中学校の遠藤正宏先生から、当日の様子と発表内容を紹介していただきます。

スクールリーダー養成コース1年／坂井市立丸岡南中学校
遠藤 正宏

私は、12月11日に東京の学術総合センターで行われた「日本教職大学院協会シンポジウム」のポスターセッションに参加した。全国の教職大学院で学んでいる院生や修了生が一堂に会し、それぞれの教職大学院の実践・取り組み・成果について、それぞれがまとめ

たポスターをもとに発表し合あった。私は、丸岡南中学校の研究体制と、福井大学教職大学院拠点校として、大学院と協働して取り組んできた内容についてポスターにまとめ、発表を行った。当初は、研究主任である渡邊朋重先生が発表、私が補助であったが、渡邊

先生にどうしても外せない用事ができて、急遽私が発表することになった。坪川淳一校長先生にも同行していただき、私の発表の補足をしていただいた。

当日は、全国から24の教職大学院の参加があった。ポスターの内容については、自分の授業実践をまとめたものや、教科指導についての研究、生徒指導上の課題への対応、大学院との連携や小中連携についてなど、大学によってかなりバラエティに富んだものだった。全体的に個人で研究したものを学校現場で生かしたものが多かったように思う。拠点校としての取り組みを発表した今回の丸岡南中学校のようなものはなかったように思った。これは、福井大学教職大学院の運営のスタイルが、他の大学院と異なっていることによるものだと思う。

福井大学教職大学院は、院生が学校現場に在籍しながら校務を行い、週末や長期休業中に大学院で学ぶという独特のスタイルをとっている。また、大学院の先生方が院生の勤める学校現場に直接出向き、学校と協働で研究を進めている。学校現場で実践したことについて大学院でのカンファレンスで省察し、次の実践につなげて発展させていく。これらの学びが学校現場で活かされ、それが院生のみでなく学校現場の教師にも貴重な学びを与えてくれる。今回、ポスターセッションに参加し、他の大学院の様子を見聞きできたことで、そうした福井大学教職大学院の特長を改めて知ることができた。ポスターセッションでの質問もそのことに関するものが大部分を占め、他者からは大変興味深いものになっているのだと感じた。

丸岡南中学校は、平成20年度より福井大学教職大学



院拠点校となり、大学院と協働して研究に取り組んでいる。大学院の先生方にも何度も足を運んでいただきながら、現在の研究体制をともに創ってきた。教科の壁を越えて一つの授業をつくっていくことを中心とした今の研究体制を維持できているのも、外部の目として取り組みの様子を見守り、時には厳しく評価していただいている教職大学院の存在が大きいと言える。

大学院の長谷川先生から、東京でこういう発表会があるので参加してみないかと言われたときは、渡邊先生がいらっしゃるので補助と言うことで安心して引き受けたが、直前になって自分が発表することになり、大変不安になった。しかし、自分たちの学校の取り組みについて振り返る良い機会をいただき、自分の頭の中も整理できたように思う。また、他の大学院の取り組みについて学ぶことができ、良い刺激をいただいた。今後も、この大学院での学びを活かし、さらによりよい実践につなげていきたいと思う。

【ポスター発表要旨】 教科の壁を越えた協働

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）
遠藤 正宏（坂井市立丸岡南中学校教諭）

丸岡南中学校（以下、「本校」と表す。）は、平成18年度に、大規模校からの分離独立の形をとって新設された開校6年目の学校である。本校は、生徒が主体的に学習に取り組めるように支援していくために、福井県内で初の教科センター方式を採用した学校として設立された。恵まれた環境を最大限に生かすために、1年生から3年生までの異学年集団で構成される「スクエア制」を考案し、給食や清掃、学校行事、生徒会活動など、様々な学校生活の中心となっている。特に、そこでは上級生が中心となって下級生への指導を行うことで、リーダーとしての自覚が生まれ、行事を終えたときの達成感を感じることができる。下級生は上級生の姿を見て、未来の自分の姿を思い描くことができ

る。これらのことが重なることによって学校文化の伝承が行われる土壌が出来上がっている。

本校では、開校当初から、恵まれた環境を教育活動に生かしていくために研究に熱心に取り組んできている。研究の取組については、開校2年目の平成19年度から、毎年、「自主研究発表会」を開催し、成果を発表している。平成20年度から、福井大学教職大学院拠点校となり、当時の研究主任が教職大学院に入学し、丸岡南中学校に勤務しながら大学院で学んだ。福井大学教職大学院は、学校現場に在籍し、現職として学校の校務を行いながら、週休日や長期休業中に大学院で学ぶスタイルをとっている。現場での実践が大学院での授業の一環としてとらえられ、履修単位とし

て反映される。大学院では、学校現場での実践について他の院生や大学院の教員とカンファレンスを行うことで、違った視点からのアドバイスを受けたり、実践について省察したり、今後に向けての展望を見いだしたりすることができる。さらに、大学院で学んだことや刺激を受けたことを学校現場にリアルタイムに還元し、院生以外の教員とも学びを共有することができる。また、インターンシップではストレートマスターの院生を受け入れ、彼らにとっては、週に3日間、学校現場で一般教員と同様の仕事をこなすことで、教師の職務の総体を直に体験でき、採用されて現場に出たときに、ある程度の見通しを持って教育活動に取り組むことができるという利点がある。

拠点校になると、研究の方向性について大学院の担当教員と協議しながら決定していくことができる。また、毎月の研究会に担当教員から貴重な意見をいただいたり、「自主研究発表会」での公開授業で、教科専門の大学教員の協力をいただいたりするなど、得るものが多い。

本校が拠点校となってからは、環境を生かす方法の模索から、授業づくりに主眼を置いた研究にシフトしてきた。生徒の主体的な学びを生み出すために、探究型学習が有効であるとアドバイスを受け、全教科において探究型学習を実践した。本校では、3年間を一区くりととらえ、研究に取り組んできている。2巡目の平成21年度からは、生徒の主体的な学びを助成するために、研究主題を「学び合う環境の創造」と設定した。授業づくりに主眼を置き、小グループでの話し合い活動を授業に積極的に組み入れることによって、生徒同士の学び合いをさせるようにした。また、教員同士の学び合いもしようと、複数教科を一くりとした教員グループを形成し、お互いの授業を見合うようにした。実際に、1年間取り組んだが、授業については教科部会主体で行い、授業を見合うことも形式的になって

いるとの反省が出た。22年度、23年度には研究主任と副主任が教職大学院に入学し、大学院での意見交換で新しい刺激をもらい、学校現場での実践について意見交換を行っている。その中で、「教科の壁を越えた協働」というヒントをいただき、形式的ではない教員グループでの学び合いを行えるように研究計画を見直した。管理職と相談し、複数教科で構成された教員グループで、授業を見合い、事後協議会を行う時間を確保してもらうことで、話し合いをしやすい素地を作った。また、「自主研究発表会」の公開授業の授業づくりも行った。大学院教員もそこに参加し、貴重な意見をいただいている。そこでの話し合いでは、異なる教科からの質問や指摘があり、同一教科の教師では見落としがちであった生徒の側に立った視点や問題点に気付かせてくれるきっかけとなった。そのようなことの積み重ねで、生徒の実態を考えた授業づくりにつながった。発表会当日は、県外の教員や大学院の院生など多数の参加者を得て、授業は大変に盛り上がった。授業後の分科会では、これも大学院での学びの中でヒントをいただいた小グループでの生徒の学びを追った分科会を行い、大変有意義な時間を得た。司会は、その授業を作った教員が行い、参加した教員から生徒のつぶやきや表情などから学びの変化の様子の報告があり、それを語ることで生徒の変容を共有することができた。通常の授業研究会では気付くことができない、深い学び合いができたと思われる。

このように、本校は、拠点校として、大学院での院生の学びが学校現場に還元され、院生を中心として学校現場でもその学びが広がりを見せている。今後も、学校現場での実践と大学院での省察を繰り返して、より新しい可能性に挑戦するなど、質の高い教育を行っていきたい。

(共同研究者：渡邊朋重)



(本ページ掲載の写真は、下記ホームページより)

日本教職大学院協会ホームページ <http://http://www.kyoshoku.jp/topics/sympo111211.html>

連携校だより

高浜町立青郷小学校

スクールリーダー養成コース1年
朽木 史昌

青郷小学校は、福井県西端の高浜町と京都府舞鶴市にまたがる秀嶺「若狭富士」と称される青葉山の南麓に位置する児童数約230名の中規模校です。低学年時に通う高野分校を有していますが、平成21年度より休校となっています。また、町内内浦地区四校の統廃合に伴い、旧音海小学校・旧神野小学校の児童がバス通学をしています。校区は、豊かな緑と美しい海が広がる落ち着いた農村地帯ですが、近年、宅地化が進み、十数年前と比較して、児童数が百名近くも増加しています。

昭和46年度、同和教育研究の指定を受けたことをきっかけとして、「仲間とともに偏見や差別に立ち向かうことのできる児童の育成」をめざして、人権・同和教育の充実に力を入れています。

さて、本校では、子どもたちが自分の思いや考えを伝え合う力を高めるための取り組みを行っています。そうすることで、子どもたち同士のつながりを深めていくことにもつながると考えています。

本年度は、コア・ティーチャー養成事業の指定を受けたことで、研究主題を「伝え合う力を高める指導のあり方を求めて～確かに読み、根拠を明確にして表現する子の育成～」とし国語科のPISA型読解力の向上に取り組んでいます。ゴール（つきたい力）を明らかにして単元を再構成したり、生活に結びついた学習意欲が高まるような学習課題を設定したりすることで、授業改善に力を入れています。そして、子どもたちが理由や根拠をもとにして話したり書いたりする力を伸ば

していきたいと考えています。授業研究は、低・中・高学年部会を設け部会ごとに事前・事後研究会を行っています。メンバーには、管理職や指導主事も加わり充実した研究会となっています。研究会では、グループやペア活動での子どもたちの発言から子どもの学びや学習課題、発問などの吟味を行っています。研究会での小グループによる話し合いの進め方や授業参観者の子どもの学びの見取り方などについては課題も残りますが、研究会の話し合いは活発に行われ、教員集団の熱意が感じられるものとなっています。

また、「伝え合う力」を高めるために、低・中・高学年別に音読や作文発表、学習のまとめを発表するという形式で学年別集会活動を行なっています。「自分の言葉で語る」、「堂々とした発表態度」、「聴き手にわかりやすいように」、などの目標を立てて年間6回程度実施しており、学年に応じた表現力や発表意欲の向上につながっています。全校では、「ハッピータイム」と名づけた英語集会活動を行っています。教員2名が輪番で全体の計画・進行をし、英語による表現活動を年間6回行っています。ビンゴゲームやペアによる活動を取り入れ、英語に楽しく親しみながら表現できる時間となっています。さらに、言語環境を整え「ことば検定」も実施しています。「ことば検定」は、四字熟語、ことわざ、慣用句についての理解を高めるためのもので子どもたちの語彙力向上につながっています。

子どもたちのつながりを深めるための取り組みとして、縦割り班活動を行っています。清掃やレクリエーション活動、運動会、グループ歯磨きを通して定期的に活動し、高学年をリーダーとした異学年のつながりを深めています。

また、保護者や地域の方とのつながりを深めていく取り組みも行っています。「親子環境美化作業」「育友会資源回収活動」「親子民話劇」「親子ふれあい体験活動」「1日学校公開（学期に1回）」などです。保護者や地域の方が一緒になって活動し交流を深めますが、子どもたちをはじめ参加されている方が意欲的に活動する姿が見られます。

このように、青郷小学校では、授業実践を中核に据



学年別集会活動

え様々な教育活動を通して子どもたちの伝える力を高め、つながりを深めるための取り組みを行っていますが、連携校として3年目を迎え、教職大学院での学びが学校での取り組みに生かされていることを強く感じています。今後も教師間のつながりを深め、教師と子どもと一緒に成長できる学校をめざしていきたいと思えます。



福井県立福井商業高等学校

スクールリーダー養成コース1年
福岡 利夫

福井商業高校は、商業科2，会計科1，情報処理科2，流通経済科2，国際経済科1の5学科8クラスの大規模な商業専門高校です。生徒は「文武両道」を合言葉に、学習に部活動にと日々熱心に取り組んでいます。

生徒は、普通科目の他に簿記や情報処理、電卓、商業経済などの商業専門科目を全体の約3分の1学び、主に全国商業高等学校協会主催の検定試験に挑戦します。これらの検定1級を3種類以上取得している数は、昨年度は北信越の高校で一番となることができました。商業に関する知識や技能の習得が、結果として資格となって還元されることで達成感を得、次の目標を設定していきます。近年は、商業での知識をさらに高めようと目的を持って上級学校へ進学する生徒が増えています。この他、英語コミュニケーション能力を高めることも目標の1つです。本校には2人のALTの先生がおられ、英語教員がALTと共にビジネスマナーや英会話など生徒の興味を引き出すように授業をデザインします。生の英語に触れることでコミュニケーション能力や表現力を高めています。また国際経済科では、ウィンターセミナーやオーストラリア研修を通して、グローバル社会で活躍できる人材の育成に努め、年度

末にはその成果を保護者の方々にも発表しています。

部活動での活躍は国内にとどまらず世界にまで広がっています。9割以上の生徒が部活動に参加し、運動部、文化部、商業関係部を問わず多数の部が北信越大会・全国大会出場を果たしています。学業とともに自分の能力や技術を高めようと部活動を学校生活の中核として捉えている生徒が多くいます。部活動が盛んなこともあり、学校の雰囲気非常に明るく、部活動で活躍している多くの生徒が学校行事や学級活動においても中心となって活躍し、他の生徒の取り組みに好影響を与え、いわば、本校の牽引車として活躍しています。何より喜ばしいことは、他校の先生方から「生徒は礼儀正しく挨拶が素晴らしい」と心温まるお褒めの言葉をいただくことです。

本校はクラス替えがなく、担任も基本的に持ち上がりです。したがって、同じ集団で3年間を過ごすことになり、クラスの団結力もかなり高くなります。クラスと部活動、この2つの集団の中に自分の居場所を作ることが出来ると、高校生活は安定すると考えます。アンケートの結果から、本校の生徒にとっては友人関係が心理的に大きなウェイトを占めています。したがっ





て、生徒の悩み・想いや行動を知る手がかりとなる授業を通して子どもの心の内を察することができれば、信頼関係を築くばかりでなく、学ぶことに対しても興味を持たせることができると考えます。

このような折、今年度、分かる授業を推進するため公開授業週間が年2回実施されました。互いの授業を見合い批評する機会の少ない高校においては、実施する意義は大いに感じていましたが、前期の公開授業は参観する教諭が少なく残念でした。そこで、各教科主任と相談し、後期には各教科から代表の授業者をお願いしました。非常勤講師の方、今年本校に赴任された方、教科主任など授業者は様々であり、慣れない公開授業に不安を抱えていました。しかし、「自分では気がつかないところを指摘されてよかった」、「生徒との距離が少し近くなった」等、どの先生方も授業を公開した意義があったと述べられていました。さらに、子どもの顔も、担任の先生が公開の教室に参観に

来られるとほころんでいました。自分たちのしっかり学んでいる姿を見てもらいたいのではないかと感じました。

就職コーディネーターの方が、就職企業訪問を終えての感想として「福商のOBの方の存在が想像以上に大きい。福井県の経済界において、本校卒業生の多くの方が各界で活躍され、福商生を温かく見守ってくれている。本校と企業との間に信頼関係が確保されていることも求人が増える要因である。」と、力強く述べられました。「今後さらに求人を増やすために、徹底した企業分析を行い新たな求人開拓に努めることが肝要である。」と締め括られました。実業高校としての福商の存在の大きさや恵まれた環境、行動の責務についてもあらためて痛感した時でした。

高度情報化、国際化など社会環境の変化により、生徒や保護者の価値観も多様化している状況の下、「生徒ひとりひとりの能力・適性を伸ばすには」、「部活動を通して学んだ人間関係や社会生活上のルールを学校生活の場で発揮させるには」、「普通科目を含めた専門的な知識と技術を有機的に関連させるには」等、教師がどのように支え合い働きかけをすればよいのか問い直す必要があると感じています。その解決の1つの糸口は、大学院での校種を超えた新たな学びや確かな理論を丁寧に校内に持ち込むことにあります。伝統に守られ、安定した状態にある本校ですが、仲間とともに本校の強みをさらに引き出し、地域に貢献できる生徒の育成にさらに取組んでいきたいと考えています。

教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは、全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設大学院等の実践と研究を交流する広場です。今号では、宇都宮大学大学院教育実践研究科の取り組みを紹介します。たくさんの投稿を期待しています。

宇都宮大学大学院教育実践研究科

教職大学院を作らなかった場合の現状と課題

宇都宮大学教育学部教授 松本 敏

はじめに

宇都宮大学教育学部は、学校教育教員養成課程（1学年150人）と総合人間形成課程（同60人）で構成され、これを87人の専任教員が担当しています。一方、大学

院教育学研究科は定員が多く（1学年70人）、教員プログラムの制度を取り入れるなど改善を図っていますが、定員割れがほぼ常態化しています。単純に学生定員を減らす改革案を出しても、学内でも文科省にも受

入れられるはずもなく、民主党政権の教員養成政策の見通しが立たない中で、身動きできない状況にあるというのが現状です。

改革のあゆみ

かつてごく普通の教育学部と教育学研究科であった本学部は、他大学と同様に、平成9年～11年の教養審答申に促されながら様々な改革を行ってきました。大学院レベルでは、一種免を専修免に引き上げるための免許法認定公開講座の開設や大学院授業の一部夜間開講を始め、現職教員が大学院で学ぶ仕組みを整えていきました。さらに、カリキュラム開発専攻（平成13年度～）及び障害児教育専攻（平成15年度～）を設置しましたが、主に夜間・休日・長期休業中の授業中心にし、小論文と面接のみで行うB方式の入試を始めたのも、現職教員を主な対象に考えていたためです。この2専攻を作った際、既設専攻には手を入れず定員増で作ったことが、70人という大きな規模になった主因でしたが、その当時は、およそ100人いた教員のポストを減らされない戦略と考えていました。ところがその後、法人化もあって大学院の設置基準を割り込む教員削減が容赦なく行われ、守りの砦のはずが自らに刃を向ける形になったわけです。

一方、学部教育の改革としては、平成10年の教職法改正後、いわゆる実践的指導力向上を目指す科目群を増設してきました。4年間を通して学校の実感を体験するように教育実習の改革も行いました。教職実践演習の実施に向けて、附属学校から教員を1人准教授（任期付き）として採用しました。教科専門科目の中身の検討も行いました。そういう流れの中で、学部の全体が教員養成に関わっているという意識は高まっており、教員が学校に足を運ぶ機会も増えてきましたが、学部教育全体の整合をとることは難しく、労の多い微調整を行い続ける苦境が続いています。全学の委員会から降りてくる改革が教育学部の実情に合わないことが多いのも、苦労に輪をかける要因の1つです。

教育学部の地域貢献（学校や教委への連携協力）としては、県内の幾つかの市町と連携し、校内研修を活性化するための授業研究会への教員派遣を積極的に推進してきました。県教委や県総合教育センターとも組織的な連携を始め、さまざまな教員派遣や研修実施の窓口としてスクールサポートセンターを立ち上げました。これは、学校支援ボランティアや教育実践インターンシップの学生を派遣する窓口でもあります。それが現在は教育実践総合センターの地域連携部門となっています。教員派遣・学生派遣ともに年間150～200件程度の派遣をしています。

他にもフレンドシップ事業やSPPで、理科を中心に

地域貢献を進めており、SSHやSELHiでは地元の高校とも連携しています。

統一の視点の必要性

このように、私たちはそれぞれの部分では内部改革も地域貢献もしてきています。しかし、福井大学の取り組みを学び続けて思うことは、私たちの取り組みには、総合性・一貫性が欠けているということです。福井大学では様々な事業を養成から研修までを見渡し見通す統一的な視点のもとに組み替えて実施しています。フレンドシップ事業も免許状更新講習もその視点で組み替えて自らの体系に位置づけてしまう識見には、目を見張るばかりです。

宇都宮大学が平成17年度に教員養成GPに採択されたときのテーマは、「授業改革と地域連携の相乗的な質的向上施策」です。授業内容・方法の改善と地域教育界との連携協力が相互作用することによって、教育学部・教育学研究科の体質改善と地域教育の活性化を図るというコンセプトでした。100人がどこかで全員関わるプロジェクトであり、学部・研究科の全体を統合するきっかけになればと思いましたが、しかし、金の切れ目が縁の切れ目で、終了後はそれぞれのユニットが次第に遊離し、見通しのきかない状態に戻っています。こうなると、一つひとつの改革が全体に効いてこないことが多くなります。

組織の長が変わっても、教師教育に関して一貫した方向を保つジャイロをどう組織の中に組み込むか。福井大学からさらに学ばなければなりません。

今後の課題

新しい教員養成制度がどのような形になるかに大きく左右されるでしょうが、まずやるべきことは、これまでの改革や取り組みをていねいに振り返り、省察することでしょう。次は、それぞれの機能を相乗的に高めるために、どうつなぐかを考えることでしょう。そうすることで、私たちなりの一貫した視点で、宇都宮大学の教師教育を再構築していくことができると考えています。

実践し 省察する コミュニティ

For Communities of Practice and Reflection

2012.3.3-4

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)

主催: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
後援: 福井県教育委員会
共催: 福井大学高等教育推進センター・教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム・福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」



2012年3月3日(土), 4日(日)の2日間にわたり, 福井大学ラウンドテーブル スプリングセッションが開催されます。本セッションでは, 教育現場における実践, 学校の協働研究の展開, 教員養成と研修の在り方, コミュニティの創造といった多様な活動に従事している実践者・研究者が集い, それぞれの取組を語り合い, 聴き合い, 共有し, そして学び合っていきます。

3/3 Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合うコミュニティを培う

For Professional learning communities
日本の教師教育改革のための福井会議2012

session 0 12:40-12:50 会の進め方について orientation

Zone A 学校: 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ Zone B 教師教育: 生涯にわたる専門職としての力量形成
Zone C コミュニティ: 学び合うコミュニティを培う Zone D 教科を問い直す なぜ学ぶのか

session I 12:50-13:50 実践交流の広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

ポスターとその場での語り合いを通して, それぞれの実践を紹介します。実践知の交流の広場です。

session II 14:00-15:20 四つの問題提起 方向性を探る symposiums

それぞれのテーマについて, 課題と方向性を見定めるための基調報告を共有します。

Zone A 学習の展開をとらえる力 Zone B 教師教育改革の展望
Zone C 地域における自治と学習 Zone D 授業づくりと評価

session III 15:30-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forum

テーマに沿って少人数で報告を聴き, 語り合うフォーラムです。

Zone A 学校: Careと専門職の学び Zone B 教師教育: 教師教育改革と組織間連携
Zone C 持続可能なコミュニティをコーディネートする
Zone D 教科: 教科を問い直す なぜ学ぶのか

3/4 Sun. 8:30-14:00

実践研究福井ラウンドテーブル

Spring Sessions

session IV 協働探究 展開を語る/プロセスを聞き取る round table cross sessions

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語りていきたいと思えます。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。。いま改めて跡づけ直して考えていること。語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思えます。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思えます。

参加申込について

参加を希望される方は、福井大学教職大学院ホームページ<http://www.fu-edu.net/>より申込書式をダウンロードして必要事項をご記入の上、dpdtfukui@yahoo.co.jpにお送り下さい。受付期間は、1月15日から2月17日までです。3/4のラウンドテーブルで実践報告していただける方を募集しております。申込書式の所定の欄にその旨ご記入下さい。

図書紹介 テストで学力は上がらない

北野秋男『日米のテスト戦略—ハイステイクス・テスト導入の経緯と実態—』

(風間書房, 2011年)

日本の学力向上政策を見ていると、これまでアメリカが突き進んできたものに追随しているように見える。すべての子どもたちが対象となる学力テスト。テスト結果による教員評価や学校評価。それを基にした予算の配分や学校の統廃合。教育活動を支えるための手段として実施されたはずのテストが今や、すべての教育活動の目的になりつつある。テストで高い成績を上げるための手段として教育活動が営まれてしまうという様相である。

北野秋男『日米のテスト戦略—ハイステイクス・テスト導入の経緯と実態—』(風間書房, 2011年)は、日米両国のテスト政策導入の経緯と実態を比較検証することを旨としたものである。本書でまず確認したいのは、両国のテスト政策導入の背景の違いである。アメリカでは一貫して人種間・学区間・学校間の格差は正に主眼が置かれている。これに対して、日本の取り組み方は果たしてこの格差は正を旨としたものと言えるだろうか。また、アメリカでは地方ごとに「教育税」にあたるものが徴収されることが多く、納税者の目が教育政策に対して厳しい。これに対して、「一般税」による中央集権体制の日本にあって、一般市民が教育政策の実態にどこまで目配りできているか、単純に比較はできない。

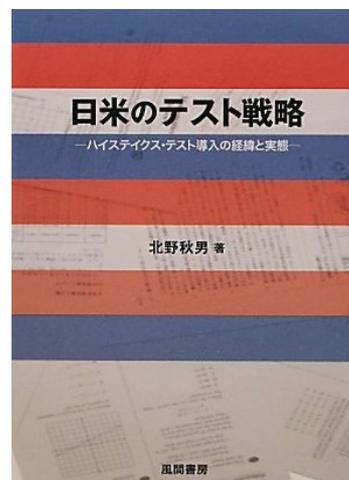
このように日米間でそもそもの前提が違うわけだが、本書で注目すべきは、厳しいテスト政策が進展すればするほど、学力の水準は低迷し、学力の質がどんどん貧弱になっていくというアメリカの実態である。同様の状況はイギリスでも起こっている。これに追随

することで引き起こされる結果は、火を見るより明らかである。こうして、「テストで学力は上がらない」という本書の結論が導かれることになる。

しかしながら、このような過酷な状況にあるアメリカに、見るべきものが何もないかと言われれば、そうでもない。テスト戦略をめぐって本書が目

ずするのは、エッセンシャル・スクール連盟(The Coalition of Essential Schools)等、競争主義的なテスト政策に対抗する草の根の取り組みで、「真正の評価(authentic assessment)」と呼ばれるアプローチである。また、評者(遠藤)の論文を引用しながらではあるが、「私たちは、生徒の成長に目を向けた学校独自の試みを応援し、支援したい」として、福井大学教育地域科学部附属中学校や富山市立堀川小学校における実践研究の展開に希望を見いだされている。このような展開は今、福井で確実に根付きつつある。矢継ぎ早に突き付けられるテスト政策に振り回されることなく、地道に取り組みを持続させたい。

(遠藤貴広)



Schedule

- 2/11 sat 入学者選抜試験(第2次) 3/21 tue 平成23年度第2回運営協議会
- 2/12 sun 長期実践研究報告会(9:30-12:30) 3/23 fri 学位記伝達式(18:00-)
- 3/3 sat- 4 sun 実践研究福井ラウンドテーブル2012

[編集後記]

「今年は、雪かきせんでもすむんかのう」と思っていたら、一昨日から大きな雪華が舞い始め、一夜にして20cmほどの積雪になっていました。それでも、翌朝には、足が雪に埋もれないようにと、何軒も家の手によってつくられる雪道が、瞬く間に縦横無尽に繋がっていました。雪の多かった昨シーズンは、この雪道をつくる人の姿を幾度も見かけ、あたたかいコミュニティの道だと感心させられたことを思い出しました。

福井大学教職大学院のニューズレターが「No.38」という号を重ね、遠地にまで届けられるのも、多くの方の寄稿で繋がっていくコミュニティの道があるからだ、改めて実感しています。(濱口)

教職大学院Newsletter No.38
2012.02.02発行
2012.02.02印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp